

長野県埋蔵文化財ニュース

No. 32

1991.8.15

(財)長野県埋蔵文化財センター

長野調査事務所
〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4
TEL 0262-93-5926

発掘調査紹介

飯山市小^こ泉^{いずみ}遺跡

飯山市教育委員会 望月 静雄

小泉遺跡は、飯山市常盤地区に所在し、弥生時代の遺跡群が密集する長峰丘陵上に所在する。工場団地造成にともない市教育委員会が昭和63年から調査を行っている（団長 高橋桂氏）。対象面積は8万㎡にもおよび、平成2年度の調査をあわせて2ヵ年で約3万㎡以上を調査した。

地形的には、長峰丘陵が分岐する地点のノッチの部分にあたるが、小河川によってそれぞれ分断された5か所の小台地と、小河川が合流して形成された狭小な低湿地とに細分される。調査は、台地を中心として進めているが、一部谷状地・低湿地の調査も行った。現在までに弥生時代竪穴住居址48軒、掘立柱建物址70軒、井戸址1基、土壌墓94基などが検出されている。時期的には中期住居址16軒、後期住居址32軒であり、それぞれ5か所の台地に中期2～5軒、後期0～11軒別れて存在している。また、中期の多い台地と後期が圧倒的に多くなる台地とがあり、时期的に占拠する台地に変遷が窺える。今後の整理作業でムラの移り変わりが明らかになる。

本稿では特に注目を集めた土壌墓（木棺墓）について紹介する。

土壌墓群が発見されたのは前記した5か所の台地のうちの1か所で、比較的狭小な馬の背状台地である。その平坦面が少ない台地の南斜面において、94基がほぼ台地の斜面にそって帯状に並んで検出された。墓域として形成されたものと推定される。表土（耕作土）直下で赤土層になり、土壌墓は赤土層にわずかに掘り込んで構築されているために、多くの遺構は底面のみの検出に終わっている。ただし、小口痕のビットは底面より30cm以上掘り込んでおり、底面が不明瞭で小口痕のみから推定した墓域も多い。



土 壌 墓 群

墓域の形態は、長軸が約2m、短軸0.7mの小口痕を有する木棺墓および長軸が0.7m、短軸0.5mの小形のタイプ、さらに小口痕のない長軸が約2m、短軸0.7mの土壌墓に3分類される。総数94基のうち小口痕の認められない土壌墓は4基で、他はすべて木棺墓と考えられる小口痕一対を有している。遺物は、遺存状態が悪かったことから、ほとんど無遺物の墓域が多いが、かろうじて底面が残っている墓域6基より管玉・勾玉が検出されている。このうち1基は小口痕を有しない土壌墓であり、管玉32点がまとまって出土している。他の5基からは一方の小口痕に接して1～20点出土した。さらにそのうち1基からは勾玉が1点検出されている。これらの土壌墓は時代を明確に出来る資料に恵まれていないが、弥生時代中期におかれることはほぼ間違いがないので、栗林期と考えている。

小泉遺跡は、平成3年度にも一部調査が残っており、整理作業・報告書の刊行は平成4・5年度で行う予定である。



川原田遺跡 上空より

●縄文中期中葉・焼町土器の馬蹄形集落での一括出土

御代田町 川^{かわ}原^だ田遺跡

御代田町教育委員会 堤 隆

浅間山麓、標高900mの舌状台地全体約1万㎡が調査され、縄文中期中葉から後葉の馬蹄形集落が全貌を現わした。この集落では、近年注目を浴びつつある焼町土器を普遍的に組列しており、復元可能なもので数十個体、破片では数え上げられないほどの個体数が確認され、同土器類型の一括出土事例としては最も充実したものとなった。

調査は、平成2年度県営圃場整備事業に伴って実施された。発見された主な遺構は次のとおりである。

○縄文時代前期集落 6軒（関山～黒浜期）

○縄文時代中期集落 46軒

（勝坂Ⅲ～加曾利E1）

○平安時代集落 19軒

平安時代？礎石建物跡
1棟

○土壌（縄文、平安）

200基

このなかでまず、縄文前期集落6軒の検出は佐久地方でも貴重な調査事例となった。しかしなんといっても特筆されるのは、縄文中期中葉集落46軒の調査であらう。これにより台地上に

残された集落のほぼ全体が検出され、当時の集落構造を解明するうえできわめて重要な成果をもたらした。また、その住居跡から検出された『焼町（やけまち）土器』は、伴出した勝坂系土器や阿玉台系土器などからもその時間的位置付けや変遷を追うことができる。あるいはこの一帯が焼町土器文化圏の中心地であったことも推察に難くない。

なお、平安集落からは「大内寺」の墨書土器が数点検出されており、礎石建物跡がその幻の寺「大内寺」である可能性を予測させる。



焼町土器 （小川忠博氏撮影）



平成2年度の発掘調査から

松原遺跡

松原遺跡は、善光寺平南部の長野市松代町東寺尾地籍にある。地形的には、千曲川右岸の三方を急峻な山に限られ西に開放する、標高350mほどの自然堤防上に位置する。今回の上信越自動車道建設に伴う調査は、この自然堤防を東西に横断するかたちで全長約700m、幅約70mの範囲について実施した。当初、弥生中期後半（栗林式期）から、中世にかけての集落遺跡と考えられたが、調査を進める中で縄文時代前期まで遡ることが確認できた。そのため平成元年度より調査を開始したが、途中調査計画は何度となく変更を余儀なくされ、平成3年度も調査を継続している。遺跡の範囲は、今回の調査で東西部分については確認できたが、南北については長野市教育委員会の調査により本線の両側200～300m程度は広がりそうである。

時代的には新しい段階から、中世、古代（8世紀から12世紀）、古墳時代前期、弥生時代後期、弥生時代中期後半、縄文時代中期末～後期初頭、縄文時代中期後半、縄文時代前期末～中期初頭、縄文時代前期前半～中頃と、今回の調査範囲では大きく区分でき、間層に厚く千曲川の洪水砂をもつ部分も見られる。最終面の調査は地

表下5m前後まで掘り下げることとなったため、物理的にも困難を極めた。また北側の金井山よりの急峻な斜面には、調査の途中で中世火葬墓群や横穴式石室を持つ幅20mほどの円墳が発見された。このように、松原遺跡は、当初予想していた以上に内容が豊富で、大規模な遺跡であることがわかり、6,000年にわたり人間が生活の痕跡を残し続けたことに驚きを感じるとともに、それぞれの時代に新しい知見を多く加えることができた。全体の概略は「長野県埋蔵文化財センター年報6・7」に譲るとして、ここでは弥生時代中期後半の集落についてふれておきたい。

弥生時代中期後半面は、地表下1.5～2mで上部に弥生時代後期（箱清水式期）の集落の基盤となる30～120cmほどの厚い洪水砂が堆積しており、後世の耕作の影響もなく遺構の残存状況は良好である。遺物については未整理のため、時期的にはっきりしない部分が多いが、従来の編年では栗林Ⅱ式から吉田式に若干かかる時期と思われる。県内の該期の集落をこれほど大規模に調査した例はなく、集落研究を行ううえで好資料である。当時の景観は現在と大きく異なり、千曲川の網



状流と考えられる河川が幾筋か流れており、その間に集落が作られる。遺構は密度に差はあるが、ほぼ調査区全体に分布する。位置的にみると、山より、中央部、蛭川よりと3群に大きく別れそうである。集落は竪穴住居跡（239軒）、土坑、円形に巡る溝、柱穴、幅の狭い直線的にはしる溝などによって構成される。それらは、幅2～3mほどの断面V字状の溝（P4図B）に囲まれたり、幅20～30cmの自然流路に巧みに区切られており、いわゆる環濠集落である。集落はその重複関係から、大きく3ないし4時期に分けることができそうである。墓としては礫床木棺墓、土壇墓などが竪穴住居跡などの建物を避けながら2～3ヶ所に集中してみられるが、溝などの施設に囲まれてはいない。竪穴住居跡の平面形態は円形、方形、長方形、楕円形（小判形）と様々であり、重複関係や分布状況から時期差と考えることができそうである。このほか注目される遺構としては、幅30～40cm、直径6～12mの円形に巡る溝をあげることができる（P4図A）。これらは竪穴住居跡と同様に一定の空間に集中することが多く、内部に柱穴などもみられないことから、当初は墓に関係する遺構と考えたが、中央に炉を持つ点や、一角に2本の柱痕跡を持つ柱穴が検出されることから、平地住居の可能性が高い。従来類例が少なく今後注目しな

ければならない遺構である。さらに幅10cmほどの細い溝や、柵列は、環濠の内外や自然流路に沿うように何重にも巡らされている（P4図C）。環濠と関係を持った防禦的施設と考えられる。この他柱穴も多数発見されており、何らかの建物が存在していたと予想される。

遺物は、多量に出土している。特に自然流路の底からは土器片や、石器が層をなして発見され、膨大な量の投棄が行われていることを示している。この他竪穴住居や環濠などにも土器片の多量の投棄が灰や炭などと共に廃絶後になされている。このように得られた資料は、質量ともに充実しており、従来あまり内容のはっきりしない該期の土器の研究に、大きく寄与すると思われる。石器についても資料は豊富である。石器の特徴としては、磨製石器類（石庖丁、石斧、石鋸、石剣、石戈）が充実している。該期の石器組成を研究するうえで重要な資料と思われる。この他木製品・自然木が河川跡の中より発見されている。杭に加工された製品や、大きな根元の部分が切断された自然木などが多く、農具はほとんどみられない。このほか、朱塗竪櫛、朱塗木製高杯、磨製石鋸を模倣した木製品などが注目される。また自然遺物も豊富で、人骨、獣骨、種子、昆虫等、多数採集されている。

川田条里遺跡

川田条里遺跡は、長野市の東部、若穂川田に位置し、千曲川右岸の後背湿地に展開する水田跡を主体とした遺跡である。現景観が条里的地割をとどめていることから、条里遺跡として認定されており、1982年に圃場整備事業に伴う緊急調査が、長野市教育委員会によって行われ、現水田下に埋没水田が確認された。ただその時点の調査はトレンチ調査であったため、水田区画のあり方、埋没水田の時期等詳細な点においては明確になっていなかった。

1989年になり、上信越自動車道の建設によって、若穂川田地区の後背湿地を高速道が縦断することになり、(財)長野県埋蔵文化財センターが、2年度にわたり発掘調査をすることになった。調査の対象となった範囲は、高速道の幅(約60m)で長さ2.4kmに及ぶ。その間には2本の河川が横断し(赤野田川・保科川)、その兩岸の氾濫原を除くと調査面積は約10万㎡を越えた。調査区はA～Eまでの5地区に分けた。遺跡の西端大星山麓の斜面部から赤野田川までをA地区、赤野田川、保科川の間をB・C地区、保科川右岸、隣接する集落遺跡春山B遺跡までの間をD・E地区とした。1989年(一昨年度)は、A地区東半、B地区の一部とC地区を調査し、1990年(昨年度)は、A地区西半、B・D・E地区を調査した。以下、本年度調査の概要を記すことにする。

A地区 本年度の調査区は、山の斜面部・山際の平坦面・低地部と地形的に3区分される。山際の平坦面

は中世の末期になって整地・盛土され、掘立柱建物や石垣などが複数回にわたって構築されたことが確認された。山際の狭い平坦地を利用した遺跡は当埋文センターでも何遺跡か調査を実施したが(小滝遺跡・前山田遺跡・北の脇遺跡)、同様な遺構がとらえられている。この共通した遺跡立地は、中世村落を考える上で貴重な資料となろう。

B地区 弥生時代から平安時代まで8面の埋没水田を調査した。弥生時代の水田跡は、自然地形の傾斜を利用する水田跡がとらえられた。

古墳時代の水田跡は3面(3時期)を調査することができた。その中でも古墳時代後期の調査面について若干ふれることにする。水路を伴う大畦を約30～40m間隔で配し、その中の水田一筆が1辺約1.5mときわめて小さく、いわゆる「小区画水田」と呼ばれているものが確認されている(P5写真)。この「小区画水田」は、昨年度の調査区でも発見されている(A・C地区)。小区画の一筆の大きさは、各地区、各調査面によって違いはあるものの、一辺約4m以下におさまる。大畦、水路の状況は、ほぼ共通している。この「小区画水田」の時期であるが、古墳時代の後期から奈良時代までの期間であったと考えられる。これ以前の水田は基本的には弥生時代の水田と変わりがなく自然地形を利用した形態をとっているようである。古墳時代の後期になってかなり大規模な土地の改変が行われたことがうかがわれる。



平安時代になると、前代までの整然とした「小区画水田」はみられなくなり、水田一筆の規模は大きくなる。また、畦の方向であるが、すべてではないものの東西南北方向に向く傾向がある点が指摘できる。

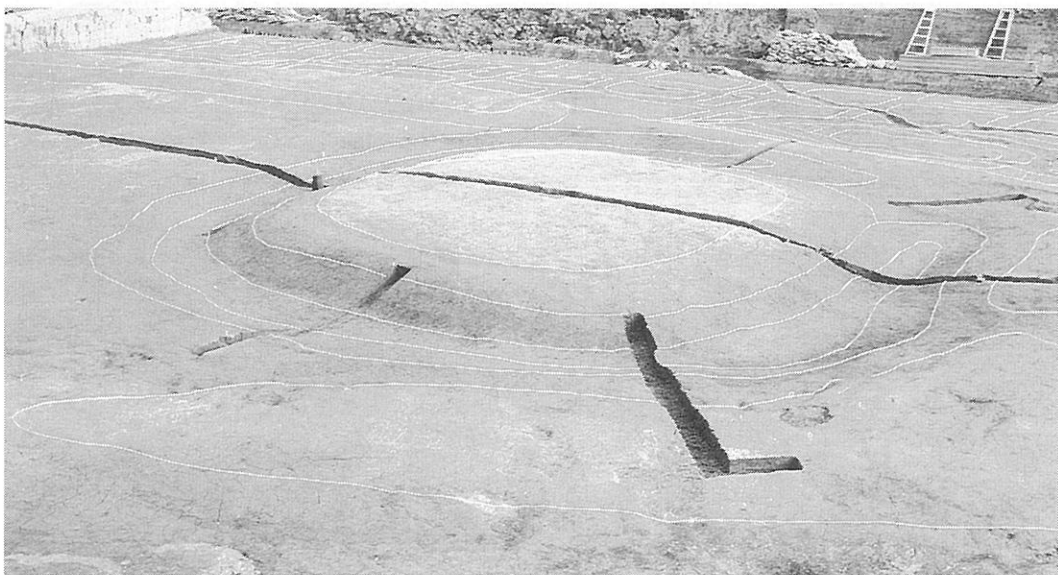
D・E地区 本地区は、保科川右岸から春山B遺跡（『埋蔵文化財ニュース』31号参照）までの間であり、水田域と居住域の境界部分の調査が、特に春山B遺跡に近いE地区の調査課題であった。ところが面的調査の結果、弥生時代の後期から古墳時代にかけて、ほぼ高速道路の路線に沿った千曲川よりの部分に微高地の裾部が調査区全域で検出された。したがって、蛇行する微高地の裾部に合わせた水田区画のありさまがかなり明確にとらえられたといえる。その境界の状況は、溝をもって画していたり、道状の遺構（大畦か）で画していたりするなど様でない複雑な状況であった。住居跡の発見こそはなかったが、約20ヶ所の土器集中区、井戸跡、道路状遺構、方形周溝墓などといった遺構群が発見され、住居を中心とした居住の場と水田域との間にまたひとつのゾーンが設定できるのではないかと期待される資料である。

1基の発見ではあるが方形周溝墓について少しふれておく。一辺約17m、やや曲線的な周溝をもっているが、特筆すべきは約70cmの盛土が確認できたことである。また、内部主体は中央部に1ヶ所、深さ約40cm、長幅186×(42)cmの土壌を掘り、その土壌底面からは木質が確認された。さらにその木質直上からは、ガラス小玉も3個発見された。方形周溝墓の主体部の構造を考える上でも重要な成果であると思われる。時期は、

現在検討中ではあるが弥生時代後期末と考えている（P6写真）。

2年間の調査をととして 平成元年度から始まった高速道路建設に伴う川田条里遺跡の発掘も、2年間で終了し、現在報告書作成にむけて整理中である。詳細はまた今後に譲るとして、課題を2つあげておきたい。川田条里の成果のひとつとして、実際に眼前に姿を現した弥生時代・古墳時代の水田区画があるといえよう。これほど広域にわたるものはおそらく現時点では県内初であろう。これらの実資料から当時の農業技術のありさまを復原していくことが今後の大きな課題と考えている。さらにもうひとつ、昨年度の成果を含めれば、調査した水田跡の面数は、弥生時代から近世に至るまで、十数面に及ぶ。この調査面数もかつて類をみなかったことである。その変遷をみていくことで、いつから条里的地割が用いられるようになったかという問題についても積極的に言及していけるのではないかと考えている。

県内における水田遺跡の調査といえば、更埴市更埴条里遺跡の調査がまず思い浮かべられるが、それから約30年の歳月が流れている。高速道路の開通は、より広く、より深く遺跡を調査することとなり、皮肉なことではあるが、30年前と比べ、とてつもなく多くのことが明らかになってきた。石川条里、川田条里、そしてこの平成3年度から新たに調査が始まった更埴条里遺跡、これらの遺跡の成果が今後とも県内の水田遺跡の基準資料となることは間違いのないことである。



平成3年度

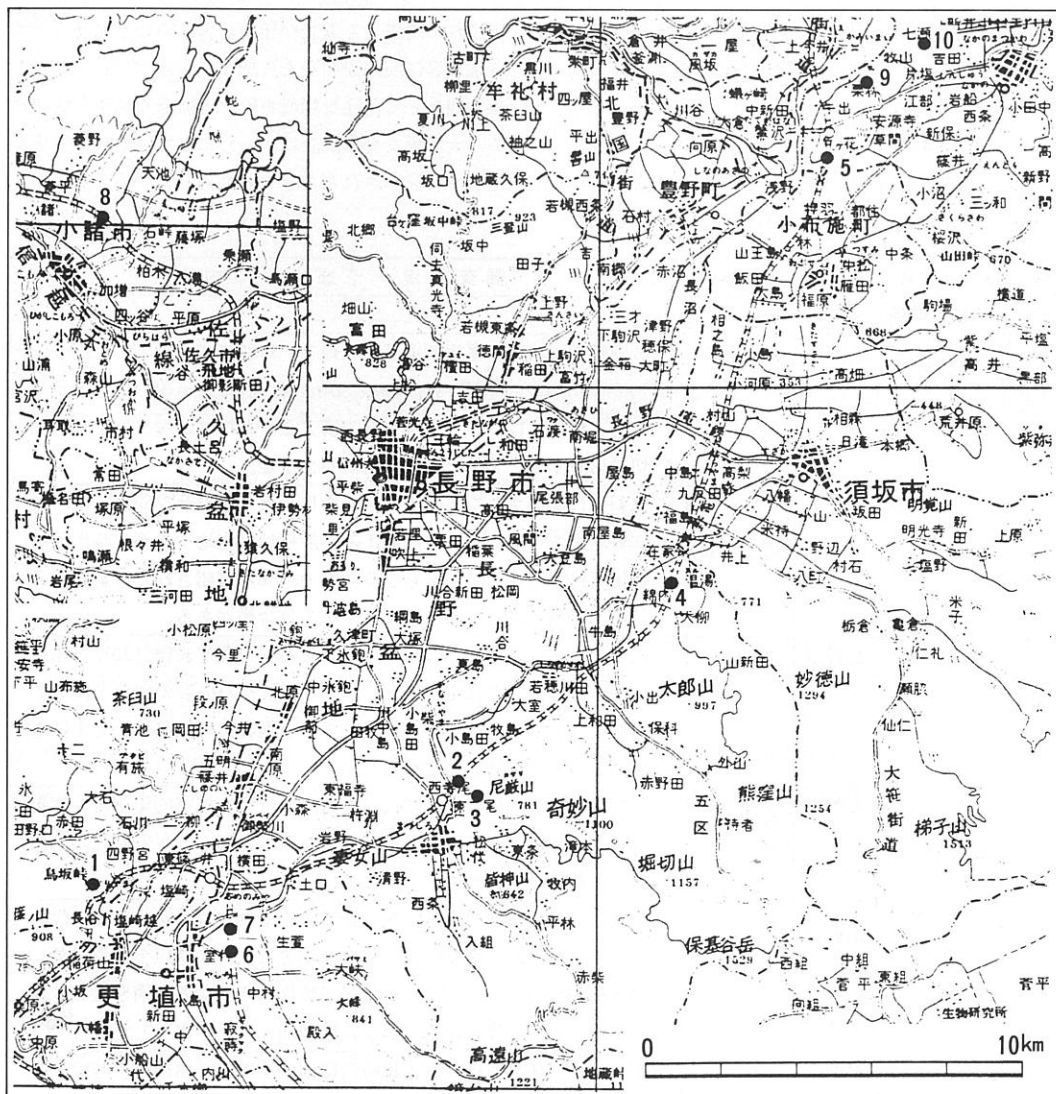
(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査状況及び予定

(財)長野県埋蔵文化財センターでは、本年度高速道路及びオリンピック道路建設にかかる遺跡の発掘調査・整理作業を計画し、4月以来着手している。その中から主要な遺跡の予想又は途中経過を拾い、下表にまとめた。沖積地に立地する遺跡が多く有機質資料の遺存状況が良好で、今年も好資料の発見が期待される。

いずれの遺跡でも調査が佳境に入る頃合を見計らって日曜日等に現地説明会を実施する予定でいる。また工事に関わって危険な場所を除けば随時の見学も歓迎する。大規模な発掘調査はめったにはないので、機会を逃さずに見学されることをお勧めします。

No.	遺 跡 名	市町村	調査期間	調 査 状 況 ・ 予 想 さ れ る 内 容
(高速道路関係)				
1	塩崎城見山砦	長野市	6月～10月	戦国時代の城郭。尾根の頂部に立地し、単郭式で山麓との比高差は100m余である。主郭（径20m×30m）は高さ1.5m程の土塁をめぐらせ、周囲には2～3段の帯郭を構える。背後の山塊とは1条の堀切で切断する。8月上旬に現地説明会予定。
2	松 原	長野市	4月～9月	急斜面に構築された五輪塔を持つ中世の火葬墓群及び同一立地の横穴式石室を持つ径20mの円墳1基、沖積地に立地する縄文時代前期の集落跡。円墳は未盗掘らしく数回の追葬が確認された。縄文集落は前期全般に渡っており、厚さ2mの包含層がある。
3	北平1号墳	長野市	4月～7月	山頂に立地する弥生時代末の墳丘墓1基。方形で長径は20m、墳丘は削り出し、高さは1m程度。長さ1.5m程の小形の埋葬主体2基が直列に並ぶが、2基とも木棺で玉類を副葬、埋納後棺上で土器を用いた祭祀が実施されている。
4	榎 田	長野市	4月～7月	自然堤防上に立地、弥生時代～中世にかけての拠点集落跡。本年度調査区域は古墳時代後期の集落にあたったほか、平安時代の木棺墓の棺材が発見された。
5	がまん淵 沢田鍋土	中野市	4月～11月	丘陵上～丘陵斜面に立地。先土器時代の遺物ブロック、古墳時代前期の粘土採掘坑、平安時代の集落と須恵器窯跡4基以上等を発見。粘土採掘坑は直径3m以上で、土師器製作に関係する遺構と推測される。また弥生時代末期の土器が丘陵斜面から集中出土している。
6	更 埴 条 里	更埴市	4月～11月	平安時代の条里水田及び古墳時代以前の水田跡。水田面、畦畔、水路等が平面的に把握され、集落域との接点も見出せそう。学史に名高い更埴条里に対する理解を一気に深められそうである。
7	屋 代	更埴市	4月～11月	千曲川右岸の自然堤防上に立地する最大級の集落遺跡の1つ。弥生時代～中世まで連続と継続する。本年度調査区域は後背湿地との接点付近に当り、平安時代の集落跡と水田跡が重複して発見されている。集落域の中心は次年度調査予定区域か？
8	東 丸 山	小諸市	6月～7月	丘陵上に立地する縄文時代中期初頭のひとまとまりの集落跡。竪穴住居跡3、土壇100程を発見。完形土器等を共伴する土壇もあり、墓壇の可能性がある。
(オリンピック道路関係)				
9	栗 林	中野市	4月～11月	千曲右岸自然堤防上に立地。弥生時代を代表する集落として県史跡

				に指定された区域の近くである。縄文時代後期・弥生時代中期・平安時代の集落跡や河川跡、近世の通船跡が発見されている。
10	七	瀬	中野市	8月～11月
				丘陵裾～沖積地に立地、弥生時代及平安時代の集落跡と推測される。プラント＝オパール分析により水田跡も確認できた。



長野県埋蔵文化財センター紀要3の発刊

このたび「紀要」3を発刊しました。B4版、横2段組、67頁で、内容は下記のとおりです。

☆ ☆ ☆

土器にみる森将軍塚古墳出現の前後

—千曲川中流域の研究と今後の課題—

古代水田跡調査の実践と問題点

青木 一男

河西 克造

遺跡の整理におけるコンピューター利用について

—下茂内遺跡での実践例から—

小林 秀行

近藤 尚義

石川条里遺跡における珪藻化石を通しての古環境復元の試み

越川 長治

このほか、年報7（1990年版）を刊行しました。昨年度当センターで発掘調査を実施した、松原、川田条里、春山B、北の脇、榎田、大星山古墳群、長土呂等諸遺跡の概要報告等を内容とします。